

これら植民地に滞在していた人物達との交流は、『新佛教』の私信欄の分析によって浮かび上がらせることができる。従来の研究では、『新佛教』は高島米峰ら仏教清徒同志会（新仏教徒同志会）の主張発表の場として位置づけられて幹部会員の論説が分析の対象となっており、周辺から運動を支えた人々、すなわち目次に現われない読者達の活動は視野の外に置かれがちであった。しかし、同志会の会員や購読者の範囲が明らかでなく、誰が「新佛教徒」なのか確定しがたいという実情や、必ずしも統一された主義を掲げないという「自由討究主義」ゆえに一枚岩的な立場が存在しないという方法上の困難を、いわば逆手にとつて、おそらくは購読者であつたと推測される、私信欄にしか名前が見えないような人物達をも広義の運動の担い手として考慮するような新しいアプローチが有効なのではないだろうか。新仏教運動は『新佛教』というメディアによって結ばれたゆるやかなネットワークとして捉えられることとなる。

『新佛教』が旧仏教に対する批判勢力を中核としながらも、仏教界、仏教アカデミズム、根岸派を中心とする文化人、そして社会主義者達といった様々なサークルが交差する空間であつたことは従来から知られていたが、私信欄の検討から、植民地行政・教育・布教の当事者達もこれらサークルに重なり合いながら加わっていたことが確認された。

このことが新仏教運動に独特の力学を与えていたことが、対支布教権問題をめぐる議論から示唆される。帝国主義に迎合するかのような布教権獲得の主張が、植民地の新仏教徒からの反応によって「信教の自由の観点から政治上の保護干渉を拒否す

る」という新仏教運動本来の方向に軌道修正されているように見える。すなわち、ここから示唆されるのは、『新佛教』が、国家の内外、植民地の内外、仏教界の内外に生ずる緊張とバランスの上に言説を生成し得た、仏教系メディアとして希有な存在であつたという可能性である。

新仏教徒の戦争観

守屋 友江

本発表では、『新佛教』に掲載された、戦争に関する論説を通して、当時の仏教徒たちの戦争観を考察する。日露戦争と第一次世界大戦という、二〇世紀初頭に起きた対外戦争に際して、彼らが戦争を肯定あるいは否定する論理は何であつたのかを明らかにする。また、鈴木大拙と井上秀天という、ともに『新佛教』への積極的な執筆者であり、禪者であり、海外経験を持ち、かつ国家主義批判を展開した二人の戦争観についても考察を行った。

新仏教徒同志会の綱領をみると、合理主義的・現世主義的な「健全なる信仰」、多様な見解を認める「自由討究」、「政治上の保護干渉を斥く」などである。この「自由討究」という特徴を反映して、『新佛教』は相反する論説を同時に掲載するが、ここで取り上げたいのは、「政治上の保護干渉を斥く」立場と「健全なる信仰」からの社会倫理の問題である。

日露戦争は両国軍に多数の死傷者を出し、軍事費の大幅増加

は経済格差の悪化を招いた。その中で、社会主義者やキリスト者による非戦論が現れ、トルストイによる反戦平和の呼びかけが『平民新聞』などに翻訳掲載された。こうした状況下で、『新佛教』の主戦論者は社会進化論的な立場からロシアを欧州の後進国とみなし、その暴虐行為を懲らしめる「正義」の戦争であると論じたり、トルストイの提案を否定して、人種・宗教差別を克服するための戦争であると主張した。現状追認論者は、戦争を批判的にとらえながらも、現実交战状態にあるのだから反対すべきでないと述べた。一方、家族の死を契機にしたり戦争の悲惨さを垣間見て、好戦的な社会の風潮に懐疑を抱き、心情的に厭戦を説く論者もいる。

約一〇年後の第一次世界大戦は、ヨーロッパが主戦場であり、当初、日本政府は出兵に慎重であった。しかし日英同盟を理由に出兵し、かつての敵国であったロシアとともに連合国の一員として参戦した。主戦論者には、日露戦争に勝利したことで「一等国」に昇格した上での参戦であり、戦争は「平和をもたらすため」の抑止力として推進すべきものと映った。現状追認論者は、キリスト教を欺瞞的と批判し、戦争こそが平和をもたらすと論じたが、その主張は、もはや主戦論者のそれとほとんど大差ない。一方、非戦論者は、日露戦争の際の頃よりも論理的な議論を展開するようになっており、戦勝祈願や参戦の非合理性を指摘し、中立国として調停に当たるべきだと論じている。

意外なことに、多くの論者が仏教に基づいた議論をあまりしない中、鈴木と井上は仏教信仰に基づいた戦争観を披露してい

る。鈴木は日露戦争時には兵士に「靈性」を見いだすと発言していたが、第一次大戦に際しては世俗の外に禅の妙味があるとしてあえて沈黙を守った。井上は日露戦争の従軍経験から戦争を厳しく批判し、ビルマ仏教にみられる「平和論」を翻訳して紹介した。

戦争への賛否ともに、道徳を根拠に論じることが多いが、それを国家主義的に解釈するか、人道的／仏教的に解釈するかで、論者の立ち位置に違いが生じる。「健全なる信仰」が現世の秩序を前提にする限り、目指す社会の方向は主戦論へと導かれていくといえる。これに対し、新仏教徒の中でも、井上は不殺生を根拠に、最も仏教に根ざした非戦論を展開したが、次第に牧歌的な隠遁生活を理想とする論説を発表するようになり、廃刊後には国家主義批判は姿を消す。この点で、鈴木が信仰の「健全さ」よりも、宗教と政治の違いにこだわりの「随所に主となる」立場を重んじたことによって、その後も国家主義や戦争を批判する姿勢を、きわどいながらも保とうとしたことは注目される。言い換えると、宗教が世俗的な価値観と異なる点において、宗教的社会倫理となりうる一例であると考えられるのである。